

第4回 富山県河川整備計画検討委員会における主な意見と対応

平成16年2月20日(金)13:30~16:30

項目	発言者	意見	内容	対応
<鴨川水系河川整備計画>				
治水	A委員	事業概要について	事業期間は20年とのことだが、工事は上流、下流どちらからやるのか。	鴨川放水路の整備は、地下埋設物の設置状況等を勘察し、施工可能な区間から順次進めるなど、より効率的な整備を図りたいと考えている。 また、鴨川放水路は延長約2.1kmで約40億円を見込んでいる。 参考までに、中川放水路は、延長約3kmで事業実施期間として30年(昭和47~平成13年度)を要した。
	B委員		事業費はどれくらいかかるのか。	
	A委員		中川放水路はどうだったのか。	
高水	C委員	流出解析について	近年、ゲリラ的降雨が頻発しており、超過確率で算出したものと実績降雨とに矛盾が生じているように感じられる。仮にH10.7.30と同じ降雨があった場合、放水路の整備で対応可能となるのか。	鴨川の計画降雨(1/50)は、最大63.7mm/hとしており、H10.7.30の魚津観測所(气象台)の最大時間雨量48mm/hをカバーできると考えている。
施工	D委員	工事中の濁水について	鴨川に限らないが、河川工事にあたっては、濁水流出防止に注意してもらいたい。特に鴨川沖合(付近)は、ホタルイカの群遊水面であり、十分留意願いたい。	工事実施にあたっては、他の河川工事同様、周辺の環境に十分配慮し、対策を講じたい。
環境	A委員	河床植物について	本文に沈水植物としてクロモ(県の希少種)とあるが、確認を要する。クロモの生育は、まずないと考えられる。	本文の「クロモ」を削除し、「バイカモ」と修正したい。 ※標本を長井会長に確認していただいた(H16.3.9)

第4回 富山県河川整備計画検討委員会における主な意見と対応

平成16年2月20日(金)13:30~16:30

項目	発言者	意見	内容	対応
<中川水系河川整備基本方針>				
環境	E委員	魚の遡上について	ウグイやアユが、沖田川放水路を遡上しようとした場合、どうなるのか。途中で止まってしまうのか。	通常時は、沖田川放水路には、水が流れていないことから、ほとんど考えられないケースと考える。
治水	C委員	計画流量配分について	中川放水路の完成により、沖田川には中川放水路下流域からの流量のみ流れることとなるのか。	洪水時は、残流域分のみの流量となる。非洪水時は従来どおりである。 また、基本方針ということで、基準地点、主要地点の計画高水のみ記載している。整備計画案の検討時に明記して説明する予定である。
	F委員		本文の流量配分図は、計画高水の記載が少なく、よく分からない。また、治水対策を要するとしている沖田川についても記載がなく判断のしようがない。	
高水	F委員	降雨解析について	現在の降雨算出方法を否定するものではないが、過去の全データを標本として算出した50年確率雨量が現在の降雨特性を反映しているのか、また、この計画降雨を基にした施設整備で本当に大丈夫なのかといった検討や説明が、今後、必要となってくるのではないかと考える。	ご指摘を受け、検討したところ、県全体として見た場合、直ちに豪雨の多発傾向があるとは言い切れないことが分かった。 ご指摘のとおりであるが、50年確率における両者の違いは、わずか(非毎年：50年、毎年：50.5年)であるため、実用上の問題は少ないと考えられる。(「応用水文統計学」より) また、豪雨が頻発しているように感じるのは雨量観測地点が増えたこととも関係すると思われる。
	C委員		確率雨量は年最大雨量を標本として算出しているが、実現象は年に何度も豪雨が頻発する年もあり、現状を正確に反映していないように思える。こういう解析手法の違いが実際の降雨と計画降雨とが乖離していると感じる1つの要因となっているのではないかと。対象とする標本を毎年、非毎年とするかで結果が変わってくると思うが。	
管理	B委員	住民への情報公開について	今後、住民が各々考えて行動できるように浸水想定区域等の情報公開に努めることが必要と考える。	情報の提供に努めていきたい。
環境	B委員	水辺空間について	本文には「地域住民が川と親しむことのできる水辺空間の確保を図る」とあるが、具体的には何を指すのか。単なる河川整備の合い言葉になっているのではないかと。現況河川の自然環境を残すところ、親水機能を確保するところ等、メリハリを付け、画一的な河川とならないよう十分留意すべきである。	中川水系では、良好な自然環境を有し、親水活動の場として活用されている中川の行田公園区間や、中川放水路の公園と一体的に整備された親水区間等が挙げられる。今後は、住民や有識者の意見を十分聞きながら、取り組んでいきたい。 基本理念を「動植物の生育、生息環境に配慮するとともに、うるおいとやすらぎのある水辺環境の保全と整備に努める。」と表現を改めたい。
	A委員		本文の河川環境に関する記述で「うるおいとやすらぎのある水辺環境の保全と整備に努める。」とあるが、河川法の主旨からすると、「生態系」が主であるべきである。	

第4回 富山県河川整備計画検討委員会における主な意見と対応

平成16年2月20日(金)13:30~16:30

項目	発言者	意見	内容	対応
<白岩川水系河川整備基本方針>				
正常流量	C委員	設定条件について	期別の正常流量の設定条件が同じ水深30cmであるのに流量が異なるが、これはどういうことなのか。	白岩川の場合、水深の条件は同一(30cm)であるが、流速の条件が各期別で異なる(30cm/s、60cm/s)ため、異なる流量が設定されることになる。
治水	G委員	放水路計画について	(1)下条川放水路の放水先をさらに下流側にした方が良いのではないか。 (2)上市川との計画高水との関連についてはどのようなになっているのか。	(1)現案は、整備延長が小さく最も経済的な案と考えている。放水先を更の下流とした場合、JR橋への影響や、整備延長が大きくなるなど経済的に不利となる。 (2)仮に、上市川と下条川放水路のピーク流量が重なったとしても、上市川の流下能力内にあり、特に問題はないと考えている。
管理	D委員	除草後の草の始末について	堤防の除草後、刈った草が海域まで流れ、漁業に影響を及ぼすことがある。そのため、維持管理には十分配慮願いたい。(白岩川沖合は、ホタルイカ群遊海面に指定)	十分、配慮したい。河川以外にも用排水等様々な要因があり、流域での取り組みが必要と考える。
環境	F委員	水辺空間について	本文の河川環境に関する記述で「うるおいとやすらぎのある…(省略)…」とあるが、河川法の主旨からすると、「生態系」が主であるべきであり、ニュアンスが違うのではないか。	基本理念を「動植物の生育、生息環境に配慮するとともに、うるおいとやすらぎのある水辺環境の保全と整備に努める。」と表現を改めたい。
	A委員		自然環境と親水を仕分けし、考えることが大切。	
	F委員	目標とする河川環境について	白岩川の河川環境は20年前と大きく違ってきているが、目指すべき河川環境としてどの時期を想定しているのか。	河川は、人々の生活と密接に関わる中で人為的影響を受けながら変遷してきたものであり、白岩川も同様と考える。その上で、現在の白岩川は、今なお多くの動植物の生息・生育環境の場となっていることから、現在の良好な状態を目指すべき河川環境として位置付けることとしている。
	A委員		昔の河川環境を目指すのではなく、現況あるいはそれよりも一昔前の河川環境を目指すのが現実的ではないか。	